よみがえる文化財

□■16

美術品修復の現場から

仲人は「児島虎次郎」

吉備国際大教授
大原　秀之氏

◆同姓でも無関係

「失礼ですが、大原美術館とはどういご関係ですか」と質問されることがあります。「いやー、大原美術館は私の兄が……」と曖昧に答えるのですが、しかし実のところ大原美術館の大原さんとは全く親類関係にありません。日本で最初に出来た西洋美術コレクションの美術館と西洋美術の修復家の名前が同じなのだから「何かあるぞ、あやしいぞ」と思われるのも当然かもしれません。その後、岡山県が生んだ偉人「児島虎次郎」が大原美術館とは深い関係にあることになったのです。

◆展覧会機に岡山と縁

それは1999年10月に成羽町美術館で始まり、翌2000年12月に大原美術館で終わるまで、全国九つの美術館で開催された「児島虎次郎展」でした。この展覧会で保存修復を担当することになった私は、出品予定作品の状態をすべて事前に調査し、傷んでいる作品は鎌倉に送り私のアトリエに〝入院〟させ、軽症の作品は大原美術館や成羽町美術館に私が出向いて現地で応急修復を行うことになったのです。

この展覧会を機に大原美術館、岡山県立美術館、成羽町美術館、やかげ郷土美術館など岡山県内の美術館と親しくお付き合いをさせていただくようになりました。大原美術館の作品ではフレデリック、アマン・ジャン、ラ・トゥシュ、フォートリエ、ピュッフェ、アレンスキ……。日本人作家では児島虎次郎以外にも黄谷国四郎、国吉康雄、今井俊満などの作品を鎌倉のアトリエに送ってもらったり、私が倉敷に出向いて修復をしていました。

◆美酒につられ……

そんな折、児島虎次郎仲人「虎次郎先生」によってあこがれの大原美術館と出会い、さらには岡山市内に大きな孤児院を作った石井十次先生の偉業を知ることになりました。「岡山ってすごいところだな」と感心して美術を愛する」私はもうメロメロ。訳がわからぬまま、気が付けば04年4月から吉備国際大学で教鞭を取るようになっていました。

◆絵医者育てて感返し

ドイツ時代には何人もの研修生を抱えて仕事をしていましたが、日本に戻ってからは「弟子を持つ柄ではない」と、かたくなに弟子を取らなかった私でしたが、「そろそろ誰を思い出して後進を育ててみよう」と決心しました。それには大原美術館を中心とした岡山県、さらには広島県、そして瀬戸内海を挟んで香川県と実にたくさんの質の高い美術館が密集しているこの地で教育することは最高の条件です。

私の教育方法は、理論はもちろん大切ですが、「手を動かす」ことの大切さを身をもって体験する「実技重視」です。しかし、もっと重要なことは「謙虚さ」と「礼儀」。05年の4月からは吉備国際大に大学院も併設され、日本全国から集まって来る学生を「絵医者」へと育て上げることが、「虎次郎先生」への感返しかと大原謙一郎理事長、それまでもうしばらく「大原美術館は私の兄が……」を、お許しください。

（次回は1月14日に掲載予定）

大原美術館

大原美術館における吉備国際大の実習風景

児島虎次郎「自画像」（宮崎　石井友愛社蔵）

きびだんご談語

オープンわずか1カ月で4人の逮捕者を出した玉野市の多国籍料理店「ワールド・ボーダーズ・ウノ」。社長の玉岡醤さんは「玉野を何とか元気にしたい」との思いで開店にこぎ着けました▲店は閉店したレストラン「クッチーナ・デ・ウーノ」の店舗を利用。玉岡さんは「地元は閉店を無くしている」と話し、仕入れ業者も「協力はしたいが、あそこだけは……」と、クッチーナが引き継ぐ〝亡霊〟をどう解消するかが課題でした▲開店当時に料理を食べた、元玉野市長でもある私の感想は「おいしい、回転ずし形式も妙案」。明治が感じられましたが、有限のオーナーは解屋さん、外国人シェフも敬遠しました。やはり〝亡霊〟はいるのかと思いたくなります。

【山本芳雄】

（おこのみ）「リレーエッセイ」は休みました。次回は来年1月14日に掲載予定です。